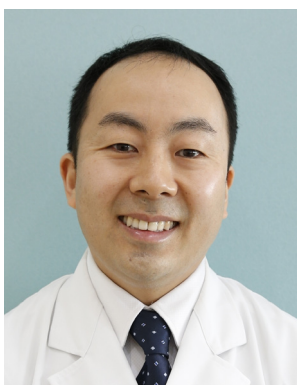


既製機能的矯正装置（マルチファミリー） を用いた予防矯正歯科治療

かねこ矯正歯科 金子 和之



略歴

- 2000年 明海大学歯学部卒業
- 2004年 徳島大学大学院修了 博士号取得
- 2004年 徳島大学医学部・歯学部付属病院医員
- 2004年 徳島大学医学部・歯学部付属病院（矯正歯科）教員
- 2006年 日本矯正歯科学会 認定医取得
- 2007年 徳島大学医学部・歯学部付属病院（矯正歯科）助教
- 2007年 池田歯科クリニック / 高知県 勤務
- 2009年 かねこ矯正歯科 開院

“「歯ならび」よりも大切なこと” 「筋機能改善が予防矯正には重要です。」

下顎の劣成長を呈する小児の中には、呼吸や睡眠に問題があり全身の発育や脳の発達など心身にトラブルが発生している小児も少なくない。放置する事が患児の人生に大きな影響を与える可能性もあり、早期発見・早期治療が大きな意義を持つ。

発育途上にある小児の筋機能を改善する事で上記の問題が解消される症例も多く、顎発育が抑制されるような筋の不調和が存在する場合には放置するべきではない。

下顎劣成長が発症する原因として、口腔周囲筋の不調和が挙げられる。成長発育中に原因を改善できれば歯列不正や不正咬合の重篤化を未然に防ぎ、便宜抜歯や骨切り手術を回避できる可能性が高くなるだけでなく、マルチブラケットなどの複雑な装置を用いた治療を行う必要が無くなる場合もある。また、不正咬合が存在する原因を無視して矯正治療を行っても予後が安定しない。

「様子を見ましょう。」という言葉には重い責任が伴う。治療法がわからない・面倒くさい、という理由で「様子を見ましょう。」では、機能の改善・心身の発育・発達の改善、顎発育の促進のチャンスを捨てる事になる。

成長の完了した患者に「永久歯が生え揃ったので矯正相談に来ました。」と言われ、その時点から下顎の劣成長を改善しようとしても手遅れで外科的な治療法を選択せざるを得ない場合もあり、歯科医師として非常に悔しい思いを味わう。

本講演では、下顎が押し込められている患者が来院した際の簡便な診断方法やチェックポイント、系統立てた治療方法など、実際の症例を通して紹介する。